



月刊

2015

5  
月号

# みんぱく

特集

## モノから生まれた ものがたり

アムール川の岩面画と三つの太陽のものがたり 佐々木史郎

渋谷の三つのモノ語り 飯倉義之

ピラミッドにまつわる物語 亀谷学

小説に生まれ変わるモノ 対談 いしじんじ×山中由里子

# 「迷宮」を探す旅

旅に出ると、「迷宮」を探す癖がある。

それはたとえば、路地が複雑に入り組んだ古い町並みであったり、内部が迷路になっている忍者屋敷のような建物であったり、ときにはそういった生身で入って行けるものすらなく、彫刻や壁面に描かれた架空の世界であったりする。とにかく現実であれ空想であれ、その場所で意識をさまざまに浸るのが好きだ。

なので、ベトナムでホンノンボと呼ばれる盆栽に出会ったときは興奮した。

ホンノンボは、ベトナムの伝統的な盆栽である。水を張った鉢に岩を置き、それを島に見立てて植物やミニチュアを配して、ひとつの景色を作る。

ミニチュアは主に、楼閣や釣り人、囲碁に興じる老人などで、ときには孫悟空なども登場する。いずれにしても植物が主体ではなく、桃源世界を写すことが目的なので、箱庭と呼ぶほうがふさわしいかもしれない。

私はそれを、ハノイのホテルで見つけた。テラスに出たら、そこにさりげなく置いてあったのだ。ミニチュアが載った岩は、遊び心に溢れ、それだけにはじめは従業員が適当に作ったオブジェか

## 宮田 珠己

プロフィール  
1964年兵庫県生まれ。主に旅をテーマにエッセイを執筆。  
著書は『ふしぎ盆栽ホンノンボ』（講談社文庫）、『たいたい四国八十八ヶ所』（集英社文庫）、『四次元温泉日記』（ちくま文庫）、『晴れた日は巨大仏を見に』（東南アジア四次元日記）（ともに幻冬舎文庫）、『おかしなジバング図版帖 モンク・ヌスが描いた驚異の王国』（パイ・インターナショナル）など。

思った。しかし、以来あちこちで見かけたため、不思議に思いつて調べてみれば、伝統的な盆栽だったわけである。

ホンノンボは私にとつて紛れもない「迷宮」であった。

自分が小さくなったつもりで、その世界の中を散策する。するとまるで山水画に紛れ込んだかのような心地がして、穏やかな気分になった。

「迷宮」はつまり、現実逃避のための道具なのである。旅に出ているのに、なぜさらなる現実逃避が必要なのか、という私の個人的問題はさておき、どんな文化にも何らかの現実逃避の道具が用意されていると私は考える。それは一般には宗教の役割なのかもしれないけれど、宗教とまではいなくても、もつと卑近な「迷宮」が、人の心を日常的に癒しているのではないかと仮定するとき、遊園地から、リカちゃんハウスに至るまで、世界中に「迷宮」が溢れている現実には深く頷ける。

ホンノンボのような、いまだ知られざる伝統的「迷宮」が、世界にはもつとあるのではないか。

そう思うと、「迷宮」を探す癖は、これからは治ることはなさそうである。

## 月刊 みんなぱく

5月号目次

- 1 エッセイ 千字文  
「迷宮」を探す旅  
宮田 珠己

### 特集 モノから生まれたものがたり

- 2 アムール川の岩面画と三つの太陽のものがたり  
佐々木 史郎
- 3 小説に生まれ変わるモノ  
対談 いしいしんじ × 山中 由里子
- 6 渋谷の三つのモノ語り  
飯倉 義之
- 8 ピラミッドにまつわる物語  
亀谷 学
- 10 ○○してみました世界のフィールド  
初航海のふがいなさ  
須藤 健一
- 12 みんなぱく Information

- 14 味の根っこ  
クスクス（後編）  
二村 淳子

- 16 文化遺産おもてうら  
台湾原住民族の工芸品に付された名前  
——創る主体と所有の主体  
野林 厚志

- 18 音の居場所  
ソリ（音）に思いを込めて  
高 正子

- 20 人間学のキーワード  
ホワイト・ネイション  
前川 真裕子

- 21 次号予告・編集後記

# モノから 生まれた ものがたり

## アムール川の岩面画と 三つの太陽のものがたり

佐々木 史郎 （民博 先端人類科学研究部）

岩が冷えて固まりきらないうちに

むかしむかし、太陽が三つあった。アムールの川は煮えたり、大地は粘土のように柔らかかった。人びとは昼間は暑くて地上に出ることができなかった。一人の英雄がふたつを射落として太陽をひとつだけにした。大地はようやく冷えて固まり、人びとが地上で住めるようになった。人びとは岩が冷えて固まりきらないうちに、その上に指でさまざまなものを描いた。それが今のシカチ・アリヤンの岩面画の由来である。

これはアムール川に暮らすナーナイ（ナナイ）とよばれる先住民に伝えられてきた「射日神話」とよばれるものがたりのひとつである。太陽を射落とす英雄の名前や、太陽が三つあること由来などいくつかバリエーションがあるが、大筋は同じである。ロシア連邦の極東地方の中心都市ハバロフスクから七〇キロメートルほど下流にあるシカチ・アリヤンという先住民ナーナイの村の近くに、不思議な線刻画が描かれた岩が河原にごろごろしている場所がある。そこには歌舞伎の隈取りのような模様が描かれたマスク（人の顔）らしきもの、ヘラジカやウマなどの動物や水鳥、そして船に乗る人びと、馬に乗る人びとなどの姿をみることができ、これらの岩面画がいつ、どのような人の手で、どのような目的をもって作成されたのかは学術的には明らかにされていない。この線刻画がみられる岩がある場所の近くには、新石器時代以来の住居址があり、土器も見つかっている。もっとも古い地層は一万二〇〇〇年前にさかのぼり、人びとの居住と活動の痕跡はそこから現代まで断続的に続いている。恐らくその一万二〇〇〇年のあいだに、ここで暮らした



マスク(上下とも)

誰が作ったかわからないモノ、なんだかかわからないモノ、べらぼうに大きいモノ、不思議なモノ……。モノから物語が生まれる場。そこには、人間の想像力の一端が垣間見られる。



シカチ・アリヤン村から見たアムール川の流れ

### 小説に 生まれ変わる モノ

対談

いしいしんじ （作家）

山中由里子 （民博 民族文化研究部）

「あんな」とおっさんは骨みたいにまっしろな歯を見せていった。「死んだ奴がな。あー、あいつビール好きやっとなあ、って奴やったら、ふつうビール瓶に入れたるやろ」「え、そうなんですか」「ここではそうなん。ガーナのおっさんはつづけた。「ベントツ乗りたかったやろな」とかな。飛行機乗ってどこか行きたかったやろな」とかいろいろあるやん。死んだら身軽やん。乗りたいもん乗せたったらええやないか。ここではそうなんや」

よくよく間近で見るとどれもきわめて精巧とはいえないまでも、ていねいに、とてもていねいに死者の乗りものとして喜んでもらえるよう、技と心をつくして作られたのだとわかった。たずねてみると製作費はバカ安だった。

（いしいしんじ「川」より）



棺桶（ビール瓶）  
パー・ジョー作  
標本番号 H0231429

企画展 岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン

会期 2015年5月21日（木）—7月21日（火） | 会場 国立民族学博物館 企画展示場

多数のワマ



ヘラジカ

人びとが描き続けてきたものと考えられている。

シカチ・アリヤン村に暮らすナーナイの人びとは必ずしもこの岩面画の作者であるわけではない。しかし、彼らはここに住み着いて以来、この不思議な画に魅せられ、独特のものがたりを作り、受け継いできた。それが冒頭の「射日神話」である。岩面画は長年の風雨と波に洗われて摩耗している。かつては石や鉄のみで鋭く彫られた線もいつしか丸くなり、人が粘土に指で描くような柔らかい線に変わった。岩が固まりきらないうちに指で描いたというのは、言い得て妙である。しかも、岩は溶岩が地中の比較的浅いところで冷えて固まってできた玄武岩である。

### 射日神話の広がり

この岩面には渦巻き状の模様が多用されている。それには日本の縄文土器などにみられる文様との関係も指摘されているが、ナーナイの人びとも何らかの影響を受けたのか、先史時代以来の文化伝統を受け継いだのか、渦巻き文様が好きである。白樺樹皮を加工して作った容器や笠の文様や服の刺繍などに渦巻きを応用した文様がよく使われる。また、かつてお祭りのお菓子としてよく作られた、エゾノウウミズザクラの実をつぶしてペースト状にして乾燥して固めたクッキーの上にも渦巻き文様が描かれた。

じつは射日神話と渦巻き文様は日本文化とも因縁浅からぬものがあるのだが、日本とアムール地方との先史時代、歴史時代における交流についてはまだ謎が多い。



ナーナイの切り絵の部分(3つの太陽が空に浮かぶ)。エンマ・キレ作 標本番号 H0221368

昨年に開催され

た特別展「イメー  
ジの力」関連のト  
クイイベントとして  
二〇一四年一月二  
九日に、作家のい  
しいしんじさんが、  
展示品から得たイ  
ンスピレーションを  
もとに物語を書き

上げる「その場小説」を披露してください。題材となったのは、  
ガーナの棺桶。

いしいさんは淡々と物語を語りながら、同時にえんぴつで書き留めてゆく。博物館資料の収集のためにガーナに行った「わたし」と、なぜか大阪弁でしゃべるガーナの棺桶屋の「おっさん」との軽妙なやりとりを聞きながら、聴衆は物語のなかに誘われてゆく。漂うことばが紡ぎだす不思議な空間に浸ること半時ほど。最後につけられたタイトルは「川」。

パフォーマンスの後の対談では、モノと物語のつながりや、博物館のモノたちへの思いについて語られた。



棺桶(メルセデス・ベンツ)  
パー・ジョー作  
標本番号 H0204933



山中 いしいさんの即興短編を集められた『その場小説』、読ませていただきましたが、鳥インフルエンザで世界の人口九八パーセントが死に絶えた世界で残ったのは大阪のおばさんだけだった、という短編大好きです。あれは大阪の市立図書館という場で出会った人びとを題材にされているみたいですが、今日はこの場で会っ

たモノ、そこに展示してあるモノに想を得た物語が生まれました。

いしい すぐその裏にあるベンツの棺桶とか。飛行機とビール瓶と、ライオンはわかるんですが、イカの棺桶はすごいですよええ。

山中 いしいさんは何のお棺に入りたいですか？

いしい やっぱ「川」だと思っんです。

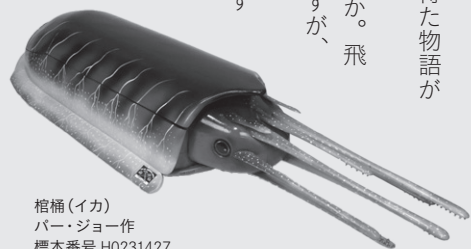
だから今日の話にも川が出たんじゃな  
いかな。僕、今日の話には自分のな  
かにある理想が素直に出てきたよう  
な気がしますね。水のなかに寝てい  
るとか水辺で寝ているというのは、僕の  
説のなかにすごくよく出てくるんです。  
死ぬっていうことと水と

いうのが、自分のなかではすごく結びついていて、  
いろんな人に、君やったらどんな棺桶に入る？と聞いてみると  
したら、アイドルの形をした棺桶に入りたいという人もいます  
でしょうし、携帯電話のなかに入りたいたいという人もいます  
でしょうし、  
……。

山中 わたしは宇宙船。UFOみたいな。  
いしい 宇宙人が乗るやつみたいじゃつですか。人類が作ったよ  
うなのじゃないやつ。それはどんなかたちかわからないですね？  
僕も書きながらいろんな棺桶が出てくるうちに、「川の棺桶」つ  
ていうのが浮上してきたんだと思っんです。

山中 「川の棺桶」は博物館には持ってこられないですよな。  
いしい たぶんね。流れていくものだから川から離れたら干上  
がってしまっんじゃないですか。

山中 「死」ということを考えると、あるモノを現地の文脈から  
取り出して博物館に入れることも、ある意味モノの「死」を意味  
するんですよ。それまで使われて、愛されて、いろんな記憶も詰



棺桶(イカ)  
パー・ジョー作  
標本番号 H0231427

# 渋谷の二つのモノ語り

飯倉 義之 いいくら よしゆき 國學院大學准教授

## 生みだされる都市伝説

話を足もとから始めたい。わたしの勤務校である東京・渋谷の國學院大學は、正門を入ってすぐに二本の石柱のモニュメント「翔」がそびえ立っている。学生のあいだには、この石柱のあいだを潜り抜けると恋人ができる、単位が取れる、受験生は合格できる、などの噂があるという。と同時に、あの石柱は大学が税金対策で立てたものだ、なので足もとを見られて建設費をぼられた、などの至極生々しい「都市伝説」も学生にはひそかに信じられている。

渋谷のモニュメントといえば、何を置いてもJ.R.渋谷駅前のハチ公像だろう。昭和初期、飼い主の帰りを待って駅前に日参していた忠犬・ハチ公。しかし彼を実際に目撃していた渋谷っ子はいまや、多くはない。にもかかわらず現在もハチ公が渋谷区の象徴として通用するのは、「忠犬の銅像」というアイコンが（待ち合わせの名所として名を拡大したためもあって）、ハチ公の忠犬の語り、渋谷駅の記憶を現在も多くの人に伝えているからだといえるだろう。

渋谷と銅像といえば、近年ネット上に出回っている都市伝説がある。渋谷駅前にあるタケシ君像に「遊ぼう」と声をかけるとタケシ君の幽霊が来て連れ去られる、という怪談だ。だが渋谷駅周辺に「タケシ君像」という像は存在しない。タケシ君像は「イメージ上の渋谷」に仮構された架空の存在、松谷みよ子が『現代民話考』でいう「あつたるべき」モノなのである。

## 心を映す語り

この三つの語りはモノと語りの三つの位相の反映といえるだろう。モニュメント「翔」の噂は、日常にある不可思議なモノを説明する機能を果たすために生み出された語りであり、ハチ公像の逸話は、モノが土地の記憶の要としての役割を果たしている語りである。そしてタケシ君像の都市伝説は、怪談の興味が現実の渋谷に幻のモノを幻視するまでに至っている。

モノを説明するため創られる語り、歴史を語りつぐよすがになるモノ、語りがイメージの中に創り出す架空のモノ。モノから生み出され/モノを生み出す語りは、いま・ここを生きるわたしたちの心を反映しているのだ。



上：忠犬ハチ公像  
右：地域で受け継がれるハチ公の「物語」



「翔」のモニュメント

まっていたかもしれないモノが、お金で買われたり、譲り受けられたりしながら違う国に持ち出されて、こうやって博物館で保管され、陳列されていく。本来は屋外に置かれて朽ちてゆくはずのものが、未来永劫保存されるんです。そういう、「墓場」ともいえるような博物館にあるモノが、いいさんの物語の力で生き返ってくるんだ、とすく感動しました。

「墓場」とか「死」とかとおっしゃったけれども、だからこそ大切にされるとも言えるわけです。我々はお墓を蹴つ飛ばしたりお菓子を撒き散らしたりはしませんよね。墓地に入ると無口になって、それをなんだか守らなければいけないような気がしますよね。それは美術館や博物館に入ったときの態度と同じ合ったところがあると思います。

例えば、空き缶を潰して作ったミニカーは、子どもたちの手で使われていけば生きていけるし使っている人が大切にします。でも文脈を切り離して博物館に連れてこられたら、それは死者となる。けど決してかわいそう



なわけではない。死者は大切に扱われるんです。人間はそういう知恵をもっているもので、こういう博物館というものを建てて大切にすべしをもち、発展させてきました。

使い道を離れたところが道具の「死」であるんですけど、そういう意味ではこのモノたちは妖怪。もののけなんです。水木しげる先生が描く妖

怪がどこかユーモラスなように、人間が作っているものですから、それがひっくり返って妖怪になっていくのでみんな愛らしいんですよ。どんなものでも。

**山中** 実際の文脈や用途とちがうところで、モノがもつ不思議な力が語りを産んで、物語の連鎖が生まれるというところに、わたしは文学の研究者として非常に興味をもっています。

**いいい** モノの用途からよりも、ことばになる前の、用途から離れた、なんだかわからないものから話の芯の部分に着想することがあります。

例えば「これはザルです。豆なりなんなりを入れておきます。あるいは水を漉すときにつかいます」。これはザルの一要素でしかないと思えます。その要素を全部とっぱらっていったときに、これがこの世に「あつてしまったこと」の切実さ。どうしてこれじゃなきゃいけないのか、ということが気になるんです。

人間も名前や職業、年齢とかどんどん剥ぎとっていったときに、なぜここにいなければならなかったのかと思う。一〇〇〇年前じゃなかったのか。アイルランドじゃなかったのか。あるいはゾウでも、サナダムシでもなかったのか。人間という生命としてここにいて、ということに違和感があるんです。じゃあなんでここにいてんだ、ということから全部の話がスタートしていると思えます。

だから博物館にきたときに、もとの用途と関係なく置かれている、その切実さ、切なさをひしひしと感じます。「なんでわたしは大阪のこんなところにいるんだらうか、ザイルのナントカ村の誰それちゃんの家にあつたら運命をまっとうできてそのまま朽ち果てられたのに、なんでこんなところにいるんだらうか」と言っているような違和感、ズレというものに共感してしまいます。

**山中** みんなくはすく切ないところなんだなって、なんだかだんだん寂しくなってきましたが……。

**いいい** 人間の感情でいちばん大切なものは、寂しき、あるいは寂しきだと思っんです。「喜怒哀楽」の「哀」。寂しいとか哀しい

# ピラミッドにまつわる物語

亀谷学 北海道大学大学院文学研究科専門研究員

いつ誰が作ったのか

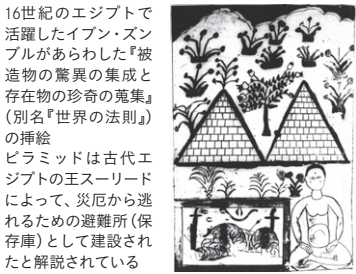
エジプト・アラブ共和国の首都カイロの西方、ナイル川がうるおす緑のベルトのすぐ外側に、ギザのピラミッドは幾千年も変わらずに存在している。エジプトには一〇〇基以上のピラミッドが確認されているが、人びとももつともよく目にしてきたピラミッドはこのギザの三連ピラミッドであろう。現在では古代エジプトのファラオであるクフ王、カフラー王、メンカウラー



左からクフ王、カフラー王、メンカウラー王のピラミッド

王によって建設されたというのが通説となっている。これは、古代ギリシャの歴史家ヘロドトスの記述をもとに一七世紀以降に再発見されたものである。古代エジプトに関する知識は、中

世にはほとんど受け継がれず、ヒエログリフなどに関する知識も消えてしまっていた。



16世紀のエジプトで活躍したイブン・ブルハーンの『被成と驚異の珍物の集』(別名『世界の法則』)の挿絵。ピラミッドは古代エジプトの王スーレドによって、災厄から逃れるための避難所(保存庫)として建設されたと解説されている。

しかし物体としてのピラミッドは厳然としてそこに存在していた。どう見ても自然のものではないそれを目にして、人びとはその由来についてさまざまな物語を生み出したのである。古代末期の著述家であるホリウスは、聖書に登場するヨセフが、

飢饉に備えるための穀物庫として建造したものであるという説を書き残し、これが中世ヨーロッパにおいても広く流布した。一方、七世紀にイスラーム勢力がエジプトを征服した後には、彼らもまた独自の説を展開した。いわく、エジプトにやってきた巨人族が建設した。いわく、エジプト古代の王が災厄の夢を見て避難所として建てた。いわく、伝説の賢人ヘルメス・トリスメギストスが古代の優れた知識を後世に残すために作った。さらには、聖書における人類の祖アダムよりも前の時代に建造されたものであるという説まで登場した。

そのような物語は、単なる物語だけで終わってわけでもない。アッバース朝第七代カリフであるマアムーン(在位八一三―八三三)は、知識の保存庫説を信じていたようで、エジプトを訪れた際に、ピラミッドの側面に穴を開け、内部を調査したという残念ながら、彼がなにか決定的なものを見つけれなかったというわけではないが、現代の観光客がクフ王のピラミッドのなかに入るときに使われている入り口は、このときに開けられたものであるといわれている。

四角錐に魅せられて

さて、ナポレオンのエジプト遠征の余波を受け、近代のエジプト学が成立したことによって、これらの想像力が失われたかというところ、そうではない。ピラミッドの力はまたまた衰えず、現在まで多くの人びとがそれぞれの形でピラミッドについて独自の見解を発表している。グラム・ハンコックの『神々の指紋』では、それは超古代文明によって作られたという説が堂々と唱えられているし、食べ物を腐らなくするなどのさまざまな超自然的効果を謳った「ピラミッド・パワー」がテレビで取り上げられた時代も、そう昔のことではない。あの巨大の四角錐には、いつまでも人びとの心に納得できないものを喚起し、物語を創造させ続ける力が、あるいは備わっているのかもしれない。

というのは、一番古くから日本の古語のなかにある。また、私たちの感覚の古い層にあるものでもありません。それはぎつと生まれてきた瞬間からみんなさみしいんだと思うんです。哀しいんだと思うんです。おなかのなかにいるときは一〇パーセント理想の宇宙なんです。そこからボンッと出てきた瞬間、寒い、うるさい、まぶしい。

山中 おなかもすくし。

いいい 全部それまでと正反対なものが襲ってくる。僕たちはそうやって徹底的なさみしさ、かなしさでこなさなになった宇宙の断片を一個一個つなぎあわせながら辛うじて生きている。そのための糊が、「ことば」であると思うんですよ。

山中 そのパーフェクトだった原始の世界を、神話や物語のことにばにして、そのことばをかたちにして描いたようなものが、世界中で作られてきました。この展示場にあるオーストラリアのアボリジニのドリーミングであるとか、曼荼羅もそうだったものかもしれません。パーフェクトな世界とのつながりを、人間はことばとかたちと儀礼などで再現しようとしてきました。

いいいさんは『月刊みんぱく』の一月号に「ねぼけた世界」という巻頭エッセイを書いてくださいました。目が覚めたばかりのときにいろいろと書き留めると書いておられました。見た夢を記録するんですか？

いいい 夢を思い出して書いていくわけではないんです。寝起きというのは、筋道がたっていないというか、理屈抜きでスススとことばが並ぶのをほったらかしにできる状態なんです。起きていくけど、寝ぼけています。

山中 その境地は、毎日の修行の成果なんでしょうね。潜在意識の下に潜ってふつとことばを探してくるといえるのは、すごく鍛錬を積まないとできないことだと思えます。「寝ぼけた世界」で書くという作業を日々しているから、こういったたくさん人の前でもできる。

いいい 確かにお坊さんに似たようなものかもしれない。お坊さんは、たった三人の前でも千人の前でもお経を読むじゃないですか。誰が聞いているとかじゃなく、自分の意志や体調に関係なく、出てくるものをすーっと素直にだしていく透明なチューブになっているみたいなものだと思います。今日はうまく読んでやろうとか、今日は女の人が多いからちょっと色っぽいお経にしてみようとか思わない。お経というのははきつと温泉みたいに湧いてくることばだと思えます。あらゆる宗教の祈りのことばというのは。それと個人の事情は関係ない。

僕は小説を書くという行為もそうあったらいいと思っています。自分自身は透明になって、湧いてきたストーリーをそのまま定着させるのが理想です。ただ、人間なんで、そんな聖人君子みたいなことはできなくて、しんどいなあというときもあります。いつもいつも同じペースにはいきません。不調の跡は小説のうえに残ってしまうわけですけど、それは人間だからしゃあない。まあ、なるだけ透明になればいいなというつもりでやっています。

「あー、あと、うちのんじやないけど、川っていうのがあった」

「かわ？ 動物の」

「ちゃうちゃう、流れる川」

「へ」。わたしは絶句した。

「そんなんどうやって棺桶にするんですか」

「いやーようしらんけど、この村から北へ九〇キロくらい行ったところに川が曲がりくねったところがあってな、その人らはけっこう川の棺桶選ぶらしいで」

(いいいんじ「川」より)

その場小説「川」は、みんぱくのホームページで公開しています。  
http://www.minpaku.ac.jp/museum/showcase/event/ishi

# 初航海の ふがいなさ

須藤 健一 民博 館長



帆網で帆の角度を調整する筆者

外洋航海してみました

フィールドに飛び込んだ研究者は、目と頭を使うだけでなく自らの身体も使って調査をする。その貴重な経験から、見えてくるものとは。第1回目は、民博館長によるミクロネシアの大海原での冒険譚である。

オセアニア展示場に雄姿を見せるチエチエメ二号は、一九七五年に三〇〇〇キロの大航海をなしとげ、沖縄国際海洋博覧会に参加したカヌーである。

チエチエメ二号の故郷サタフル島は、先祖伝来のアウトリガー・カヌーを駆使して外洋航海をおこなう航海師がいることで注目されてきた。その技と知識が、失われていたオセアニアの大型カヌーと航海術を復興させたからである。わたしは一九七八年から八〇年にかけて延べ二五か月、サタフル島へ航海術の調査に赴いた。サタフルはミクロネシア連邦ヤップ州の州都から一〇〇〇キロ東方のサンゴ礁島。三か月に一度、五〇〇トンの連絡船が通う、周囲六キロ、人口五〇〇人の絶海の孤島である。船上二〇泊の船旅でたり着いた。

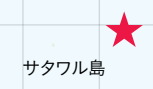
## カヌー航海事はじめ

一九七九年一月に初航海の機会に恵まれる。西隣のラモトレク島へ病人見舞いに行くカヌーに便乗した。老女と孫娘とその一族の五名の男性にわたしが加わった。航海師は信望の厚い若者で老女の甥。長老の天気予測も間かず、気のせく老女は朝九時ごろにカヌーを出させた。

ラモトレク島はほぼ真西にある。東からのうねりを目安にカヌーを進める。しかし、海面は鏡のよう。じりじりと照りつける太陽のもとでの船旅である。年配の男が「風よ来い。風よ来い」と風車に呪文を唱えるが、そよ風が吹くのみ。

老女の口ずさむ歌が波切音と調和して心地良い。航海師はその歌の意味を老女に尋ねるが、老女は教えない。彼女は小さいころから著名な航海師の父に連れられて島々を航海し、海の知識を身につけたという。航海術は男性の世界だが、彼女の知識は二目おかれている。夕方に後方のサタフル島が視界から消えた。二六キロ進んだだけ。

タロイモと魚の夕食を終えた日没のころから心細くなってきた。全長八メートル、狭い客室と甲板の他に休む場所もない。船体は海面からわずか



サタフル島

この苦い体験がやみつきになり、その後も暗礁への魚釣りや無人島へのカメラ捕りのカヌー航海を試みた。しかしながら、星と波と風にもとづく伝統的航海術を十分に学ばずに海へ出て、自分自身の忍耐のなさや航海術の知識の未熟さに打ちのめされた若いころの調査は、特別な思い出である。

三〇センチ浮いているのみ。わたしの寝る場所は、一メートル足らず幅三〇センチの横木の上。足をのばすと膝から下が海に入る。フィールドワークとはいえ、どうしてこんなカヌーで航海に出たのか？ 風が来て船体に海水が入ったらどうなるのか。などなど、不安が恐れになる。悪い状況を想定してはため息をつくばかり。

## 嵐と漂流と後悔と

日没後、北東の風をうけてスピードが出る。進行方向右手の水平線低くにある北極星と左手の中空に輝く南十字座から針路を割り出して進む。上空には天の川が横たわっている。航海師が中間点に来たと告げた一時間、前方に雲が湧き上がる。あつという間に全天雲に覆われ、年配の男が法螺貝をふいて呪文を叫び、嵐除けを試みるが効果なし。月も星も隠れた暗闇となり、「この世の終わり」という絶望感にさいなまれる。

航海師は帆をおろして漂流の道を選ぶ。熱帯とはいえ風雨のなかで体は冷えて震える。ますます、不安がつり、悶々とする。こんな気持ちを航海師に投げつけられない。とそのとき、救いの知恵が浮かんだ。「カヌーは木製、沈むことはない」「わたしは泳ぎに自信がある」「この海域には猛なサメはいない」。よって、何があってもカヌーにしがみついて風をやり過ぎせばよい。危機的状況下でこの単純明快な答えがわたしの恐怖心を掃として、正常心で航海することができた。

一時間ほどカヌーを流し、嵐が去ったので帆を上げることになった。しかし、若き航海師は、漂流後のカヌーの位置を見失い、どの方位にカヌーを進めるのか混乱した。そこで、やおら携帯無線機でサタフル島の父に、カヌーがどこにいるかと聞いている。情けない航海師である。父の指示どおり、帆をおろした位置まで戻って、そこから目的地へとカヌーを進めた。横木の上でまごころみ、日の出とともに六時半ごろに目を覚ますと、前方に平らなラモトレクの島影が目に入った。



アウトリガー側から風を受けて進むカヌー



人と荷物をおくカヌーの客室

展示場リニューアルのお知らせ

3月19日(木)から南アジア展示・東南アジア展示があたりしくなりました!!

南アジア展示

南アジアは、豊かな自然環境のもと、さまざまな宗教や文化、社会集団が共存しあう知恵を育んできました



右からジャガンナート神、スバルー神、バララマ神/インド

東南アジア展示 起源を異にする民族がさまざまな生活スタイルでくらす東南アジアでは、民族や文化が入り組み、異種混種の世界が広がっています



水上人形(漁師の夫婦) ベトナム

みんなくセミナー

時間 13時30分～15時(13時開場)

会場 本館講堂

定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は観覧料が必要です)

第444回 5月16日(土)

先住民が守る古代遺跡

講師 佐々木史郎(本館教授)

極東ロシアのシカチ・アリヤン村の岩面画は、ロシア考古学の父と称されるA.P.オクラトニコフが調査したことで有名になりました

みんなくセミナー サロン 研究者と話そう

時間 14時30分～15時30分

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

本館の研究者が来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩

5月3日(日) 本館南アジア展示場

くらしに思つく豊かな宗教伝統

講師 三尾稔(本館准教授)

5月10日(日) 本館ナビひろば

染織の伝統と現代

講師 上羽陽子(本館准教授)

5月17日(日) 本館ナビひろば

南アジアの結婚式と音楽

講師 寺田吉孝(本館教授)

5月24日(日) 本館企画展示場

シカチ・アリヤンの岩面画とナナイの神話

5月31日(日) 本館ナビひろば

なぜ「イスラムの語源は平和」という誤解が流布するのか? マスコミと御用学者の功罪

講師 西尾哲夫(本館教授)

躍動する南アジア 春から秋のみんなくフォーラム2015

新しくなった展示にあわせて、南アジアの躍動感あふれる姿を、さまざまな関連イベントを通じて紹介します。

関連イベント

ワークショップ

◆忠実再現! インド西部の刺繍布

展示資料の模写に挑戦!

日時 5月24日(日) 6月7日(日)、28日(日)

3回連続講座 10時30分～16時

会場 本館ナビひろばなど(定員12名)

講師 上羽陽子(本館准教授)

三尾稔(本館准教授) 6月28日のみ

応募締切 5月10日(日)必着

※参加費各回500円(別途要展示観覧券)

事前申込、中学生以上の刺繍経験者で全3回ご参加いただける方対象

企画展

「岩に刻まれた古代美術」アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン

極東ロシアのシカチ・アリヤン村には考古学では世界的に有名な岩面画が残されており、先住民が聖なる遺跡として守ってきました

本展では世界で初めて現在見られるすべての岩面画を拓本と写真を用いて一斉に紹介します

雪の中から浮かび上がるヘラジカ

会期 5月21日(木)～7月21日(火)

みんなくミュージアムパートナーズ

「点字体験ワークショップ」

目で読む文字から手で読む文字へ。点字で異文化コミュニケーションを体験してみませんか

日時 5月9日(土)12時～15時30分

会場 本館エントランスホール

※参加無料、申込不要

カレッジシニア

「地球探究紀行」

みんなく研究者が驚きと感動をお届けします。世界の文化の奥深くへ一緒にどうぞ

時間 13時～14時30分

会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」

※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回10000円

主催 産経新聞社

特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団

5月13日(水)

星と風と波と オセアニアの偉大な航海者

講師 須藤健一(本館館長)

5月27日(水)

アムール河の古代岩面と神話

少数民族の聖地シカチ・アリヤン

講師 佐々木史郎(本館教授)

お申込み・お問い合わせ ウェブ産経カレッジシニア係

06-6633-9087

研究部新メンバーのご紹介(4月1日付)

寺村裕史(文化資源研究センター助教)

国際日本文化研究センター・文化資料研究企画室特任准教授を経て現職。専門は文化情報学/情報考古学。日本(主に古墳時代)・ウズベキスタンやインドなどをフィールドに、文化資源のデジタル化・情報化に関する研究や、GIS(地理情報システム)を援用した歴史文化研究に従事。著書に『景観考古学の方法と実践』(同成社、2014年)などがある。



巡回展「イメージの力」国立民族学博物館コレクションにさぐる

会期 6月27日(土)～8月23日(日)

休館日 毎週月曜日(ただし、月曜日が祝日の場合はその翌日)

会場 郡山市立美術館(福島県)

主催 郡山市立美術館

国立民族学博物館

千里文化財団

友の会

友の会講演会(大阪)

時間 14時～16時(講義と併せ、懇談会もしくは展示見学会を開催します)

会場 本館第5セミナー室 ※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円

第443回 6月6日(土)

聖なる遺跡は物語る アムール河の少数民族ナナイの神話をさぐる

講師 佐々木史郎(本館教授)

アムール河流域の諸民族は、多様な口承文芸をもっています

シベリア諸民族と共通するものもあれば、射日神話や兄妹始祖神話のように日本や中国など東アジアと共通するものもあります

神話の世界を探ると、精神文化や宗教のみならず、近隣諸民族との交流や自然現象との結びつきなどが見えてきます

聖なる遺跡シカチ・アリヤンの岩面画をたよりに、アムール河流域に伝わる神話の世界をさぐります

●講義と併せ、企画展「岩に刻まれた古代美術」を見学します

第444回 7月4日(土)

ヨーガの隆盛をさぐる 現代インドにおける「伝統」の再評価

講師 竹村嘉晃(現代インド地域研究国立民族学博物館拠点拠点研究員)

インドを発祥とするヨーガは、近年、新たなエクセサイズとして世界中で人気を集めています

その波はグローバル化が進むインド社会にも環流し、美容や健康はもとより、宗教や政治、産業やスポーツといった多面的な文脈において展開しています

本講演会では、近代ヨーガが構築された近現代史を紐解きながら、経済発展の影響による社会変化が著しい現代インドにおいて、ヨーガが隆盛している文化・社会的な動向について考えます

●講義と併せ懇談会を開催します

第70回 6月25日(木)

日本の食文化 昆布に親しむ

※表紙ウラの案内をご覧ください

体験セミナー

第70回 6月25日(木)

日本の食文化 昆布に親しむ

※表紙ウラの案内をご覧ください

体験セミナー

第70回 6月25日(木)

日本の食文化 昆布に親しむ

※表紙ウラの案内をご覧ください

体験セミナー

第70回 6月25日(木)

日本の食文化 昆布に親しむ

●無料観覧日のお知らせ

5月5日(火)祝のこどもの日は、本館展示を無料で観覧いただけます

ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合は、入園料が必要ですよ

●みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)新規メンバー募集

みんなくミュージアムパートナーズは、みんなく博物館活動をサポートするため自主的な企画を運営する市民パートナーです

この度9月から活動する新しい仲間を募集します

定員に達し次第、受付終了です

応募期間 4月25日(土)～5月10日(日)

お問い合わせ先

みんなくミュージアムパートナーズ事務局 平成27年度新規募集係

Email minpakukyo@ac.minpaku.ac.jp

※みんなくホームページで詳細を確認の上、ご応募ください

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください

※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です

みんなくホームページ http://www.minpaku.ac.jp/

みんなくフェイスブック http://www.facebook.com/MINPAKU.official

みんなくツイッター http://twitter.com/MINPAKUofficial

電話でのお問い合わせ 06-6878-8560(本館 広報係)



# 味の根っこ



## どこから来て、どこへ行く？ クスクス (後編)

二村 淳子 にむら じゅんこ ライター／比較文化研究者



カビリー地方のソースなし「アマクフル」

リやニジェールの遊牧民たちに珍重され、食されている「アフエズー」とよばれるイネ科の実を模して「よく丸めた」ものからきているのではないかという。ブルゴル（ひきわり小麦）のようにひきわるのではなく、わざわざ丸める理由はここにありというわけだ。

### 地中海を渡って

クスクスが、アフリカ大陸を南下したのか北上したのかは謎だ。その後、クスクスは、一〇一世紀ごろ、地中海を渡った。現在発見されているクスクス最古のレシピはスペイン南部で編まれたものである。また、一二世紀の書『食卓の秀逸』によると、ムスリムやユダヤ人だけでなく、キリスト教徒もクスクスを食べていたという。アンダルスでは、一度焼いたパンを小さくちぎって「丸めて」クスクスにする方法もあった。

イベリア半島ではクスクスはほぼ消滅したが、イタリアではクスクスはいまだに現役だ。とりわけ、シチリアの西海岸では、クスクスは絶対に欠かせない休日のご馳走の定番になっている。主婦たちは朝五時には既にクスクスを打ち始め、イカスミをまぶしたクスクスや、豚肉とブロッコリーのクスクスなどを作る。トリポリでは、クスクスにムール貝を入れる。世界クスクス祭りが年に一度開かれているのも、ほかならぬこのシチリアである。

### マグレブ生まれ？ サヘル生まれ？

クスクスの発祥地は不明である。現在、クスクスが「常食」として食べられているのは、いわゆるマグレブ（日が沈む地）地域。つまり、モロッコ、アルジェリア、チュニジア、そしてモーリタニア、そしてリビア西部だ。ここは、地図上に国境が引かれる以前は、ベルベル人たちが自由に移動してきた一帯でもある。アラブ世界の中心地であるマシユリク（日が昇る地）の国々でもクスクスに似た料理があるが、それらは「マグレブীয়」つまり「マグレブの料理」とよばれている。この呼び名からも、クスクスがマグレブの地の料理だということがわかるだろう。「クスクス」ということばも、ベルベル語の「セクス」が語源とされている。このことばは、「よく丸められた」という意味をもつことばの派生語だという。

ベルベル人が食べていた初期のクスクスにはソースがなかったらしい。カビリー地方に現存する古い料理には、「スクック」や「アマクフル」などがあるが、前者は乳清を、後者は炒めた野菜を加えて新鮮なオリブオイルをかけるシンプルな料理だ。ソースをもたらししたのは、七〜八世紀ごろにアラビア半島から移動してきたアラブ人である。

### そして新大陸へ

「新大陸発見」のころになると、今度はクスクスは南アメリカへと渡っていった。運び役は、イベリア半島出身のセファルディム系ユダヤ人だ。ブラジルのサンパウロのクスクス、通称「クスクス・パウリスタ」は、モロッコの西海岸部の港から追われたポルトガル系のセファルディムたちが伝えたものだ。型に入れてオーブンで焼くこの料理、原型からは離れてしまったような感じがするが、モロッコ西部のユダヤ人たちのクスクスと比べてみると、ソースをあらかじめ粒に吸わせていることなど、共通点があるような気がする。

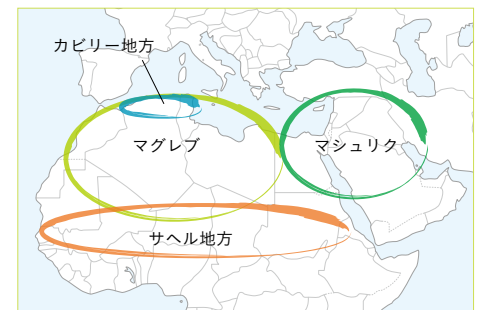
遊牧民や離散民に運ばれ移動を続け、その形も変えてきたクスクスの冒険は現在でも続いている。どんな国の料理にも収まることなく、国境を軽やかに越えていくクスクスの旅はこれからも続くだろう。



モロッコのユダヤ人コミュニティで食されるアーモンド入りクスクス



コートジボワールのキャッサバで作ったクスクス「アディエケ」



モロッコ、アガディールの港の南瓜入りクスクス

パスタがいくつももある。一四世紀半ばのイブン・バトゥータも、その旅行記「諸都市の新奇さと旅の驚異に関する観察者たちへの贈り物」で、サハラ以南でクスクスが食べられていたことを記している。民族学者マルソー・ガスト氏によれば、もとは、クスクス状パスタは、今でもマ



乳、シナモン、砂糖だけの甘いクスクス「スファ」

### モロッコ風クスクス (5〜7人分)

肉 (鶏、牛、羊など)	700g
玉ねぎ (大)	2 個
にんじん (中)	3 本
カブ (中)	3 個、トマト 2 個
ズッキーニ	2 本
ひよこ豆	1 カップ
オリーブオイル	大さじ 3
* 香辛料 (生姜、パプリカ、ターメリック、クミンのパウダー)、シナモンスティック、コリアンダー、パセリ	適量
クスクス	2.5 カップ
塩コショウ	少々
無塩バター	大さじ 1

- ① 鍋にオリーブオイルをしき、玉ねぎと肉を炒める。
  - ② 香辛料を入れてからめ、シナモンスティック、コリアンダーとパセリを糸で束ねて水を入れ、中火で 30 分煮込む。
  - ③ カブやズッキーニなど早く煮える野菜を大きめに切り入れ、さらに弱火で 25 分煮込む。
  - ④ シナモンスティックとコリアンダーとパセリの束を出し、最後にひよこ豆を入れて弱火で 10 分。
  - ⑤ お湯でもどしたクスクス (前号参照) の上にソースをかけ、好みによってアリッサ (ハリッサ)・ソースなどを添えていただく。
- \* このレシピは、マラケッシュのダダ (伝統料理人) から伝授されたものをアレンジした。野菜は 7 種類入れるのが縁起がよいとされる。季節の野菜、ブルーベリーなどの果物も可。香辛料は何も入れない地方もあるので、好みによって加減を。

# 台湾原住民族の工芸品に付された名前——創る主体と所有の主体

野林 厚志のばやし あつし

民博文化資源研究センター

工芸品は有形だが、それが作られる過程ではさまざまな無形の要素がかかわっている。素材についての知識や手の動かし方、表現を豊かにする技巧、そして工房内外の人間関係。作品の図案もそのひとつだ。

## パイワン族の刺繍を学ぶ

筆者が台湾のイノシシ狩猟についてフィールド調査をしていたときのことである。何がきっかけだったかは失念したが、わたしが居候していたパイワン族の一家の娘婿が、自分の親戚がパイワン族の伝統的な衣装を作っているで紹介すると言われ、ある工房を訪ねたことがあった。そこでは、主人である女性が刺繍を施したパイワン族の衣装や、カバン、小物を制作し販売していた。当時、あまり台湾原住民族の工芸やもの作り

に関心がなかった筆者は、こういったところから新しい製品が生まれるのだなという程度の感想しかもたなかった。それから一〇年ほどたった現在、わたしはこの工房の二階に寝泊まりをしながら、日中は刺繍を習得するフィールド調査をしている。師匠はもちろん件の女性である。刺繍を勉強したいと彼女に伝えたところ、「ここにきてから一〇年ほどになるのに、そんなこと今まで一言も言わなかったじゃないか」と冗談半分に説教をくらってしまった。筆者の言

い訳は、針仕事などはあまり好きではないが、じつにさまざまなものを作られている様子を見ているうちに、自分でも作ってみたいと思いはじめたということである。また、刺繍の手法や針を知ることで、民博が所蔵している台湾の原住民族の衣服に施された刺繍の技術の歴史的な変化がわかるようになるのではないかと考えたからである。紋様の形態や種類、モチーフの変化を論じる前に、刺繍そのものを理解しなければ何もわからないというのが、館蔵資料の調



工房での制作の様子

査やそれらを使った展示を重ねてきた筆者が出したひとつの結論だったのである。

## 無形文化財保持者のふるまい

筆者が弟子入りしたこの女性は、じつは台湾の政府関係機関が認定した原住民族工芸の無形文化財保持者である。台湾と日本とでは制度が異なるので、人間国宝は言い過ぎかもしれないが、原住民族の工芸作家としてはかなり有名で、作品は海外の展示会に出展され、台湾の企業が広報に彼女の作品を使うことも少なくない。民博の常設展示場にも彼女の工房で制作されたパイワン族の首長の衣装が展示されている。筆者が担当した「台湾原住民族」のコーナーで、現代のパイワン族の伝統衣装の制作を依頼したのである。彼女は今まで作ったことのないあらた



外部から発注を受けて作ったパイワン族のモチーフがほどこされたベスト

な刺繍の図案をこの衣装のために考えてくれた。工房で働く助手もこの図案はとも優れているから、きつ



民博に展示されているパイワン族の首長の衣装

といていい作品に仕上がると制作過程で話してくれていた。そのことばに違わず、世界にふたつとない一点ものの衣装を作ってくれた。

ところで、彼女の工房にはいろいろな人が出入りする。一般の観光客、彼女の評判を聞いて作品を買ったり買いに来たりする人、彼女に刺繍を教えてもらいに来

りを知ることが出来る。そして彼女は来客、すべてに親切で丁寧に対応する。冷やかして写真だけ撮りに来る客やわたしのような調査者にも分け隔てない笑顔を与えてくれる。彼女に言わせれば、来る人すべてが自分にとって大切なお客さんなのだ。

## ものに付された名前のもつ意味

そんな優しい彼女も夕食の後にタバコを燻らせながら筆者と喋っているときは、ちらちら本音を覗き出す。時折、耳にするのが自分の刺繍の図案が勝手に使われることへの不満である。パイワン族の刺繍の図案は基本

的なモチーフは共通しているが作り手の個性が出る。熟練した作り手が熟慮し工夫をした図案が刺繍でほどこされた衣装やカバンは商品的価値も高い。そうした独創的な図案はときとして他人に別のコンテンツの素材にされてしまう。以前は図案を見ればこれは誰その作品だということがあったものだが、今はそうした範囲を越えて彼女の作品が動いているために、知らないあいだに利用されることもある。自分が創ったものであることを示すために、作ったものに自分のイニシャルロゴを刺繍で縫い込むようになったのだ。

「誰が創ったのか」「誰がもっているのか」。ものに付された名前にはこのふたつの要素をあらわす機能がある。つまり、作るといふ行為と所有という状態のふたつの主体であり、文化遺産の無形性と有形性という属性がよくあらわれているのではないだろうか。



# ソリ(音)に思いを込めて

韓国の伝統芸能パンソリを継承する在日コリアン3世の女性。  
彼女の生み出す「音」には日本人、韓国人、そして在日コリアンをつなぐ「場」を作り出す力がある。



パンソリの登場人物になりきる安聖民

## 韓国の伝統芸能パンソリとは

「音」を韓国語でいうと「音(ウム)」と「ソリ(ソリ)」のふたつがある。「ウム」は漢字の読みで、「ソリ」は固有のことばである。ソリには音のほかに声という意味があるが、この声の芸能が韓国にはある。一人の歌い手が太鼓の伴奏、鼓手に合わせ、語りと節のある歌、身振りによって物語を紡ぎだす芸能で、パンソリという。パンとは場・幕などの意味があり、パンソリが演じられる形態をいう。韓国では国の重要無形文化財に認定され、伝統芸能として伝承されている。一八世紀末にその原形が完成したといわれるパンソリは、祭りや市が立つ日に村の広場で、網渡りや民俗楽器の演奏、民謡や踊りなどとともに演じられる大道芸のひとつであった。ヨーロッパの吟遊詩人のように全国を巡りながら、つらく苦しい生活を強いられる人びとを慰め、癒してきた。人びとはパンソリの物語のなかに自分を重ね、泣いたり笑ったりすることで心を解放した。このような韓国の伝統芸能を継承としている在日コリアン三世がいる。彼女の名は安聖民。ここでは、安聖民の活動を紹介することで、

高正子  
コオチヨンジャ  
神戸大学非常勤講師

ソリが人の人生にどのように影響し、そして、人と人をどのようにつないでいるのかを考えてみたい。

## パンソリとの出会い

安聖民がパンソリに魅せられたのは大学生のころだ。きっかけは大学の先輩に誘われ学び始めた韓国語。教えてくれた在日二世の彼女は大阪、在日集住地で「生野民族文化祭」を中心とした民族文化活動の担い手の一人だった。自然とその活動に参加し、そのなかで民族楽器や民謡を知った。初めて聞いたはずのその「音」がどこか懐かしい。そう、それは幼いときに母が台所で一人歌う朝鮮民謡のあの「音」。原点はそこにあった。安聖民が参加した「民族文化牌マダン」(一九八三



南原でのレッスン風景

年結成(前身は「マダン劇の会」)は在日二世・三世たちが民族文化を学ぶ場として作られたグループで、公立の小・中・高校で民族楽器の演奏や民謡の演劇を通して伝統文化の紹介や在日としての生きざま・思いを伝える学校公演を中心的な活動としていた。楽器のリズム、民謡の調べ、そして自分のことを語る在日の言葉……それらの「音」が子どもたちに響き、その場にいた人と人をつなぐ……。『マダン』の活動にのめり込んだ安聖民はパンソリを学ぶための留学を決意する。公立小学校の民族学級講師の職を辞し、パンソリの本場全羅南道・光州へ渡り、基礎をみっちり教わった。その後、ソウルで伝統音楽の理論を学ぶべく大学院へ。現在の師匠、パンソリ「水宮歌」の国家重要無形文化財技能保有者・南海星先生に師事することになる。毎年、夏になると全羅北道・南原の山に籠って修業をするレッスン合宿(サンコンプ)は今年で一五回目になる。「どうして日本人なのにパンソリを習うの?」。姉妹弟子たちに尋ねられ、安聖民は答える。「わたしは日本で生まれた韓国人なのよ。わたしたちはね……」。彼女たちは安聖民の語る「音」から在日コリアンを感じる。

## 在日の思いをソリに込めて

パンソリはもともと広場で楽しむ大道芸で、人びとは歌い手が語る話に一喜一憂し、物語はその場でどんどん創られていく。安聖民が日本で活動する理由がここにある。自



「アラン」を競演する出演者たち(2014年7月20日、みんぱくでの研究公演)

分の生まれ故郷である大阪で、ともに暮らす人びとに自分の話を「音」として伝える。パンソリが語られる場が一体となつてつながっていく。そのために日本語の字幕を入れ、ときには日本語の歌詞を入れ、共感・共有できる時間を増やす。昨年七月二〇日に民博での研究公演「アラン峠を越えていく」——在日コリアンの音楽の今——でも、彼女の「音」は多くの人に受け入れられ、好評を博した。また、昨今は日本の語り芸である浪曲とのコラボなど、さまざまな試みを通して芸の幅を広げようとしている。

彼女の願いはパンソリを創作することである。在日コリアン三世である彼女の思いを込めたパンソリを聞く日もそう遠くはないだろう。

「ホワイト」とは色のことではない。白人のことを意味している。つまり「ホワイト・ネイション」とは白人の国家である。しかし白人ということばを用いるからといって誤解しないで欲しい。白人・黒人・黄色人といった人種分類は、近代科学を巧みに利用しながら生み出された虚構で、現在ではこれらのことばを学術用語として用いる人はいない。白人ということばは、ある問題の所在を明らかにしようとしているのである。

わたしはオーストラリアに七年暮らした。その間、あの国が多文化を謳歌<sup>うたか</sup>している様を肌で感じてきた。燦燦<sup>さんさん</sup>と輝く太陽、さまざまな言語が飛び交う市場、活気に満ちた町には思い思いの装束に身を包んだ人びとが闊歩<sup>かつぽ</sup>する。移民たちはあの自由で大らかな国を目指しはるか世界を旅してゆくのだ。しかし一方で、あの国の根底にはイギリスなどヨーロッパに出自を遡ることができるといわれる人びとが、支配的な立場を独占するヨーロッパ中心主義的な思想が存在する。文化人類学者のガッサン・ハージはこの問題に取り組んできた第一人者だ。彼は一九九八年に、その名も『ホワイト・ネイション』と題した著作を刊行した。ハージは著作のなかで、多文化主義を推進してきた七〇年代以降のオーストラリアが、多様な出自をもつ移民たちを寛容や平等という理念のもとに受け入れてきたことを批判的に考察している。

寛容に平等、大いに結構ではないか。しかしハージは、それらのことばに隠されたトリックに惑わされてはならないと

## ホワイト・ネイション

White Nation

前川 真裕子 三重大学人文学部特任准教授

遠い国の話ではない

人間学のキーワード

警告する。まず彼はジョン・ロックの『寛容についての書簡』を分析しながら、人が誰かに対して「寛容であろう」とするときに前提とされる主体と客体の権力構造を指摘する。寛容を実行できる人間とは他者に対して社会的に優位な立場にある人間なのである。例えば領主が領民たちを「寛容に扱う」とはいうが、領民が領主に「寛容に接する」とはいわない。寛容ということばには、このことばを発する主体の潜在的な優位性が内在しているのだ。

オーストラリアにおいて寛容の発話者は、イギリスなどヨーロッパから移住してきた人びとであるとハージはいう。実際、イギリスの入植が始まった一七八八年以来、あの国ではヨーロッパ的な諸規範が主流となってきた。それ以外の国々からやって来た人びとは肩身が狭く、彼らがオーストラリアで暮らしていくためには、それら諸規範に無条件で従う必要がある。オーストラリアはあらゆる人びとにとって平等を約束してくれる国ではない。ヨーロッパ的な枠組みのなかで従順に生きる人間にのみ平等を約束する国だというわけである。「ホワイト・ネイション」とは、この暗黙のうちにされるヨーロッパ中心主義に光を当て、批判的な考察を加えていくためのことばなのである。

ホワイト・ネイションの考えは、日本にいるわたしたちにとっても遠い国の話ではない。周りを見渡せば、そこかしこに不平等さが潜んでいるだろう。この国に潜むのはどのような潜在的優位性だろうか。

## 編集後記

本号でとりあげたいしいしんじさんの「その場小説」は、「川のひつぎ棺」という短編小説として『新潮』2015年4月号に掲載された。イベントでの語り比べると、活字になった小説では情景や人物がより細かく描き込まれ、登場人物も増えている。ガーナの棺桶屋の「おっさん」は「老店主」となっており、もはや大阪弁では語っていない。みんぱくの特別展会場という場で共有された半時ほどの生の語りがかんおけが全国展開する文芸雑誌に13ページのテキストとなって掲載されたことはうれしいかぎりであるが、作家のイマジネーションの源泉に近いところで、彼の口から直接湧き出てくる言葉に浸る高揚感を味わうことができたことも忘れられない体験である。

3月19日、南アジア展示場と東南アジア展示場が色鮮やかに生まれ変わり、リオープンした。さらには、本号の編集時点ではまだ準備中である企画展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」が5月21日から開催される。新緑の候、ますます活気あふれる展示場にぜひ足をお運びいただきたい。

(山中由里子)

## みんぱくをもっと楽しみたい 人のために——会員制度のご案内

### 国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引に比べ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

### みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

### 国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話06-6877-8893/平日9:00～17:00)

●表紙：飛行機から見たアムール川(撮影・庄司博史)。  
ヘラジカの絵は、シカチ・アリヤン岩面画より

## 次号の予告

特集

## 躍動する南アジア

## 月刊みんぱく 2015年5月号

第39巻第5号通巻第452号 2015年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信  
編集委員 山中由里子(編集長) 櫻永真佐夫 河合洋尚  
庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 丸川雄三  
編集アドバイザー 山内直樹  
デザイン 宮谷一 長岡綾子  
制作・協力 一般財団法人千里文化財団  
印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に  
お願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

